空想傾性（Fantasy Proneness）のポジティブ機能

松岡和生

一　はじめに

かつて旅した街並みの美しい風情を思い出して心地よい気分に浸る、恐怖映画の一場面が頭から離れず見なければよかったと後悔するなど、イメージ体験はポジティブ、ネガティブどちらの出来事にも結びつき、その体験を彩り、その経験印象を強める働きをもっているようである。さらにイメージ体験はその人の生活全般のウェルビーイングにも大きな影響を与える可能性をもっている。

本稿におけるイメージとは「現実に対象がないときに生じる疑似知覚的経験」を指している。イメージは視覚に限らず、音や香り、身体運動のイメージなど、それぞれの感覚で生じ、さらにすべての感覚をともなう体験そのものの再現やシミュレーションを可能にする「イメージ体験」がある。イメージのポジティブ機能を考えるうえではこうした体験としてのイメージの視点が重要である。イメージ体験には一般的な思考イメージの他に、空想や白日夢、夢見や幻覚、直観像や共感覚なども含まれる（松岡　二〇〇〇）[1]。

最近のイメージに関する研究では、イメージの感情調整に果たす役割が注目されており、臨床心理学や精神医学の分野だけでなく、認知心理学や脳神経科学の分野からもイメージと感情の相互作用関係と感情に対するイメージの機能に関する実証的研究が蓄積されるようになっている（松岡　二〇〇五[2]、宮崎・菱谷　二〇〇四[3]、本山・宮崎・菱谷　二〇〇八[4]、Holmes, et al., 2008[5]）。しかしながら、こうした感情調整におけるイメージ機能は心理臨床の文脈のなかで適応異常や精神病理との関連から検討されていることが多く、人が日常生活を送る上でより積極的な役割を果たすイメージ活動とは何かというポジティブ心理学の視点からのイメージ研究はまだ少ないようである。

本稿では、極めて強いイメージ体験能力を有すると思われる空想傾性者（Fantasy Prone Person）ないしはファンタザイザ（Fantasizer）の心理特性について概説し、これらの人たちが日常生活において心的イメージの制御と積極的活用を可能している要因を検討した研究を紹介することにより、心的イメージ経験がもつポジティブで適応的な機能の一端をみていくことにしたい。

二　空想傾性（fantasy proneness）とは

空想傾性（Fantasy Proneness）はウィルソンとバーバー（一九八三[6]）によって最初に記載された概念で、「時間の多くを自分で作り上げた世界、すなわちイメージと想像と空想の世界の中で生きる」少数グループの人達の特徴を示している。ウィルソンとバーバーこれらの人々を「空想傾性者」ないし「ファンタザイザ」と名づけ、これらの人々を対象に、さらに深く詳細な面接調査を実施して、典型的な「空想傾性」の特徴を明らかにした。（Fantasy Proneness の邦訳「空想傾性」は中井久夫（二〇〇一[7]）による。）

その特徴とは、

① 高感度の催眠感受性を有している
② 空想や想像へ長時間深く没入する傾向がある
③ 幻覚的な（現実に匹敵する）鮮明さでイメージを体験する能力がある
④ 腐った物を食べたと想像しただけで吐き気を催すな

どイメージによる身体反応が生じやすい

⑤ 非常に鮮明な幼少期の記憶を報告し、また極めて早い時期の最幼児期記憶を持っている

⑥ 毎日非常に生々しい夢を見る、豊かで鮮明な入眠時幻覚を報告する

⑦ ときおり空想と現実の区別が困難になるときがある

⑧ 体外離脱体験、テレパシー、第六感、予知、霊的体験などの超自然的体験との親和性が高い

などであった。出現率は母集団の数％程度と推定された。

空想傾性者の多くは大学院修了の学歴をもつ専門職業従事者たちであったが、ウィルソンとバーバーは、これらの人たちに何ら精神病理的な徴候はなく、むしろ健康と創造に優れた人々であり、自分たちの空想体験を積極的に楽しんでおり、社会的にも高水準で適応した人々であることを強調した。またきわめて高い他者への共感性も認められた。

典型的な空想傾性者たちは、「空想傾性」というイメージ体験能力の最も強い一方の極に位置づけられる人たちである。これは古くはゴールトン（一八三）[8]が報告した幻視者タイプの特性と類似したものであり、直観像素質者（Eidetiker）の特性とも重なっているようである（松岡二〇〇一）[9]。

三　空想傾性と関連現象

リンとルー（一九八八）[10]は、約六、〇〇〇人の大学生を対象にウィルソンらが作成した空想傾性を測定する尺度（ＩＣＭＩ短縮版五二項目）を実施し、その得点の上位二―四％を空想傾性者群、下位二―四％を非空想傾性者群、その他の被験者を中間群に分類し、ＭＭＰＩやロールシャッハテスト、解離傾向尺度、創造性検査など様々な心理検査を実施して空想傾性について系統的な検討を行った。また空想傾性者群に分類された一五六人に対してはさらに詳細な面接調査も行われた。

リンとルーの研究は、おおむねウィルソンらの研究知見を支持するものであった。この研究でも先に挙げた空想傾性者の基本的特徴が再確認された。様々な心理検査の結果

は、空想傾性者群が他の群と比して、創造性が高く、認知・感情的活動が豊かでバランスがとれており、社会的適応も良好でポジティブな自己概念をもっていることを示すものであった。一方で、一部の空想傾性者には不適応傾向や、分裂病型人格、境界性人格と関連する病理的徴候が認められ、空想傾性と解離傾向との関連性を示すデータも得られるなど、空想傾性のネガティブな側面も明らかになってきた。空想傾性をもつ人々の共通の生育歴としては、想像や空想の活動を強く奨励されるような家庭環境、幼少期における親からの虐待経験などが挙げられている。

リンらの研究の他にもＩＣＭＩを用いた多くの研究が報告されており、創造的思考や創作活動、ＵＦＯ拉致体験、悪夢や明晰夢、虚偽記憶やソースモニタリングの失敗などが空想傾向と密接な関連性をもつことが指摘されている。

最近、オランダのメルケルバッハら（二〇〇一）[11]は、ＩＣＭＩに替わる新たな空想傾性の測定尺度（Creative Experience Questionnaire：ＣＥＱ）を開発し、ストレス障害や精神病理、そしてイメージ能力や記憶との関連について精力的に研究を進めている。彼らの研究では、空想傾性得点とＤＥＳとの間には比較的高い相関が認められ、また空想傾性と幻覚の体験する傾向との間にも相関関係が確認された（Merckelbach & Van de Ven, 2001）[12]。さらに大学生を対象者とした共分散構造分析を用いた因果モデル分析から、トラウマが解離を引き起こし、それが空想傾性や認知の失敗を引き起こす因果モデルよりも解離が空想傾性や認知の失敗を引き起こし、それがトラウマの原因となる因果モデルのほうが適合度の高いことを示すデータが報告されるなど、発達過程の因果モデルの分析も行われている（Merckelbach, et al., 2002）[13]。このようにＣＥＱは解離体験や幻覚性の体験を予測する重要な指標となっている。

筆者たちはＣＥＱを翻訳して日本語版を作成し、信頼性と妥当性について検証を行っている（岡田・松岡・轟木二〇〇四）[14]。この日本語版尺度の得点分布はほぼ正規分布しており、また主成分分析から、この尺度が「子ども時代の経験」「一般的空想体験」「異常体験」の三因子からなる単純な内部構造をもつことも確認されている。

四　空想傾性の機能の方向性を規定する要因

空想傾性に関するこれまでの研究を見ると、空想傾性の強さには、病理性をもたらすネガティブな働きと生産的で創造的な体験をもたらすポジティブな働きの二つの機能があることがわかる。空想傾性がネガティブ・ポジティブどちらに結びつくかは、性格特性、想像・空想経験のコントロールあるいは状況への対処の仕方などによって異なってくるものと思われる。

空想傾性の強さが病理をもたすのか、それとも精神的健康をもたらすのかを左右する要因は何なのか。この点を明らかにする研究も最近行われるようになってきた。

クーパーとリンチ（二〇〇九）[15]は、ＩＣＭＩを用いて空想傾性が抑うつ傾向の病理と結びつくのはどのような場合かについて、健常大学生を対象に検討した。彼らは抑うつ傾向に対する空想傾向の効果を媒介要因する要因として、対処の回避と統制場（Locus of Control）の二つのモデルを仮定した。回避モデルでは、空想に没入することは、対処が必要な現実の経験から注意を逸らしその現実を回避する役割を果たすため、精神的な問題をもたらすと仮定する。一方、統制場モデルでは、ポジティブな空想活動には自分の生活を制御している感覚（内的統制）が必要であり、それができないと感じている人（外的統制）が抑うつの徴候を示すと仮定する。結果は、大学生では空想傾性の強さが抑うつの徴候と結びつく要因となるのは回避要因ではなく、外的統制要因であることを示すものであった。すなわち、外的統制が強い群では空想傾向が高いほど抑うつ傾向が高くなるのに対して、内的統制が強い群では空想傾向の高さは抑うつ傾向に何ら影響を及ぼさなかったのである。彼らは、外的統制感の強い者は、空想傾性が強くなるほど空想と現実の間にできた相違を自ら解決するのが困難と感じやすく、そのことが抑うつ症状の原因になっていると考えている。

筆者たちの研究では、特に神経症傾向（情緒安定性）が空想傾性のポジティブ・ネガティブな方向性を左右する重要な媒介要因であることを見出している。以下では、こう

した媒介要因に着目して、空想傾性が人のウェルビーイングにもたらすポジティブ効果を検討した筆者たちの研究について紹介する。

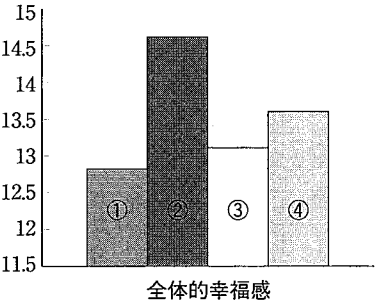
五　空想傾性と主観的ウェルビーイングの関連性

ウィルソンとバーバーの最初の調査では、空想傾性の資質が、日常生活を送る上でより豊かで生産的かつ創造的な役割をもつことが強調されていた。この点を直接明らかにするために、我々は主観的ウェルビーイングの尺度と神経症傾向尺度、その他の心理指標をいくつか組み合わせて、空想傾性の強さが精神的健康やウェルビーイングを高めるための規定因について検討することにした。空想傾性が高い水準の神経症傾向と結びついた場合にはその人のウェルビーイングを低下させ、結びつかなければむしろウェルビーイングを高める働きがあると予想された。

松岡・岡田（二〇〇五）[16]は、大学生四一五名を対象に、空想傾向の強さがウェルビーイングに及ぼす効果とその規定因について検討した。空想傾性の測度には、メルケルバッハら（二〇〇一）[11]のＣＥＱの日本語版（岡田・松岡・轟木　二〇〇四）[14]を用いた。また主観的ウェルビーイングの測定尺度には、主観的幸福感尺度（ＳＵＢＩ）（籐南ら　一九九五）[17]を使用した。神経症傾向の測度としては性格特性質問紙（堀毛　一九九九）[18]の下位尺度を用いた。その他に日常生活におけるイメージ体験質問紙（嶌田・増山　二〇〇〇）[19]もあわせて実施した。

調査結果の分析に当たっては、まずＣＥＱ得点とビッグ５の情緒安定性（神経症傾向）得点に基づいて、各尺度上位四分の一を高群、それ以外の下位四分の三を中低群とし、それらを組み合わせて、被験者を①高空想傾性＆高神経症傾向群、②高空想傾性＆中低神経症傾向群、③中低空想傾性＆高神経症傾向群、④中低空想傾性＆中低神経症傾向群の四群に分類し、これら四群間の主観的幸福感について比較検討した。

その結果、ＳＵＢＩの下位尺度である「全体的幸福感」の得点は、高い神経症傾向と結びつかない高空想傾性群（②群）が他の群と比較して最も高くなることが示された



①高空想傾性＆高神経症傾向群
②高空想傾性＆中低神経症傾向群
③中低空想傾性＆高神経症傾向群
④中低空想傾性＆中低神経症傾向群

図１　空想傾性と神経症傾向から分類された４群間の全体的幸福感の得点
（松岡・岡田、2005）

（図１）。また空想傾性（高vs中低）×神経症傾向（高vs中低）の２要因で分散分析を行ったところ、空想傾性と神経症傾向との交互作用は有意な傾向を示した。これらの結果から、空想傾性が神経症傾向と結びつかない場合には、空想傾性の強さは積極的にその人の生活のウェルビーイングを増大させる効果をもつことが示唆された。

この調査では、パス解析を用いて空想傾性とウェルビーイングを媒介する性格特性と日常のイメージ経験の影響についても分析を行った。その結果、性格特性では、神経症傾向と開放性が空想傾性の媒介要因としてウェルビーイングに対してポジティブな方向にもネガティブな方向にも影響を与えていること、また日常のイメージ経験との関連では、特にイメージ経験を意図的に制御しているかどうかが、空想傾性がウェルビーイングを高める上で重要な媒介要因になっていることが示された。こうした結果は、空想傾性がポジティブ機能をもつための条件を考えるうえで極めて興味深い。

神経症傾向の関与の重要性は、松岡・堀毛（二〇〇六）[20]でも確かめられている。この調査では一七八名の大学生を対象とし、空想傾性の測度としてＣＥＱ、ウェルビーイングの指標としてはキースら（二〇〇二）の「主観的ＷＢ尺度（ＳＯＳＷＢ）[21]」を使用した。あわせてウェルビーイングと関連の深い自尊感情尺度も実施した。媒介要因としての神経症傾向の測定には、和田（一九九六）[22]の性格特性尺度を用いた。さらにこの研究では、感情強度指標（Affective Intensity Measure：ＡＩＭ）（Larsen & Diener, 1987）[23]を使用し、感情経験の強度との関わりについても検討を試みた。

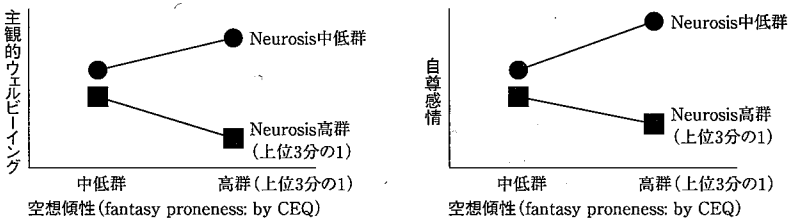


図２　空想傾性と神経症傾向がウェルビーイング及び自尊感情に及ぼす効果
（松岡・堀毛、2006）

その結果、空想傾性得点と神経症傾向得点を上位群と下位群に分けて分散分析を行ったところ、空想傾性と神経症傾向が主観的ＷＢ及び自尊感情に対して明確な交互作用をもつことが示された（図２）。すなわち空想傾性が主観的ＷＢおよび自尊感情といったポジティブな精神状態に与える効果は、神経症傾向の強さによって左右され、神経症傾向が低い群では空想傾性は自尊感情を高めるポジティブ効果を、逆に神経症傾向が高い群では主観的充実感を低減させるネガティブ効果をもつことが確認された。またパス解析により感情強度指標との関連性を分析したところ、空想傾性が感情強度に強い影響を与えること、さらに空想傾性は感情強度を媒介として主観的ＷＢに影響を及ぼすことが明らかになった（松岡　二〇〇六）[24]。空想傾性者は日常生活において強い感情を経験する傾向があり感情の振幅も大きいといった特徴をもつようである。

六　まとめ

空想傾性がポジティブ機能を実現するために必要な要件は、人が健康的でウェルビーイングを伴った生活を実現するうえで示唆に富む。その要件のひとつは神経症傾向（情緒安定性）との関わりであり、もうひとつはイメージの操作性・統御可能性との関わりであった。情緒が安定し、イメージの意図的統御が可能であることが、イメージ活動や空想活動をポジティブで精神的な健康状態へと向かわせる重要なカギになることが示唆された。

一般に、イメージは感情増幅機能と感情調整機能をもつことが知られている（e.g. Holmes, et al., 2008、松岡[5]

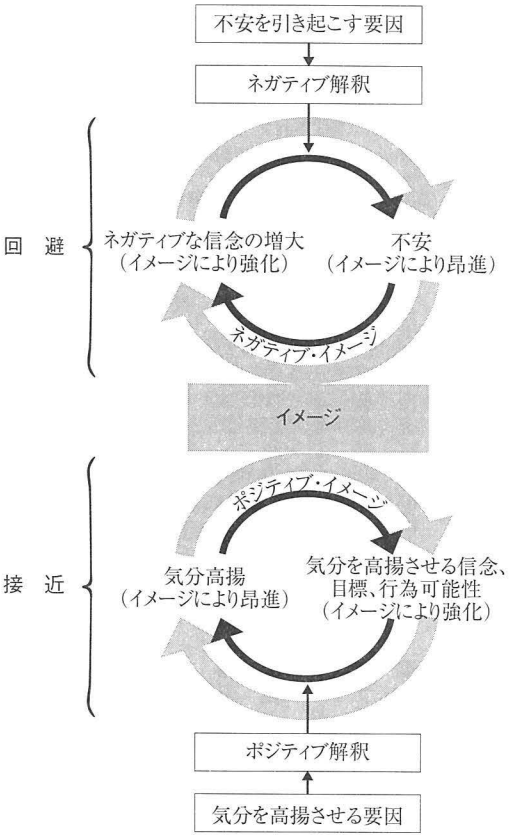


図3　感情に対するイメージ機能の作業モデル
（Holmes, E. A., 2008 のモデル図を改変）

が、本稿で紹介した空想傾性者（ファンタサイザ）であろう。ホームズは、感情に及ぼすイメージの機能を示した作業モデル（図3）を提出し、感情増幅機能はポジティブな方向にもネガティブな方向にも働くことを示している。またポジティブ・イメージの体験が一種のワクチンとして、抑うつやPTSDに対して予防的な機能を果たすことについても言及している。ホームズたちは、病理を回避し感情調整を可能にするためのイメージ機制について実験的手法を用いた一連の研究を進めている。

今後は、空想傾性がポジティブ機能果たすための媒介要因に関する検討がさらに必要であろう。そうした要因として強いイメージ能力はそれだけ感情増幅機能が強くなり、イメージ体験自体の強度も高くなってくる。そのため強いイメージ能力を有する人々では感情調整の役割はより重要な意味をもってくることになる。その典型的な例

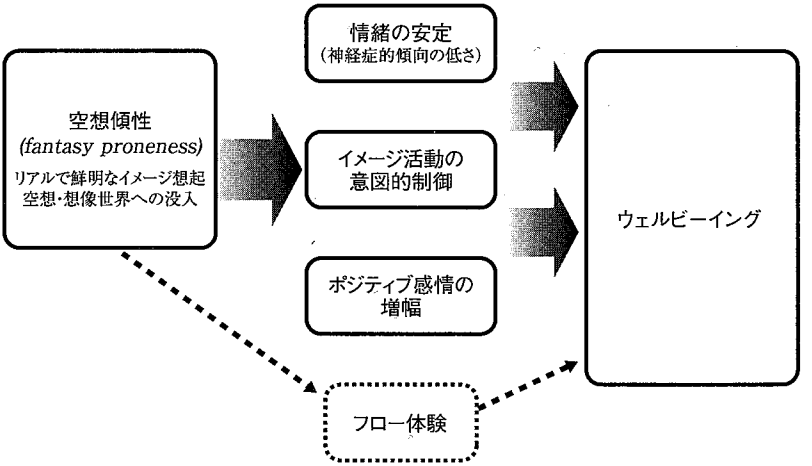


図4　空想傾性のポジティブ機能のまとめ（ウェルビーイングに及ぼす影響とその媒介要因）

ては、本稿で紹介した人格特性や認知スタイル、イメージ統御能力の他にも、たとえば注意の制御などの認知機能との関わりが注目されるだろう。また、ポジティブ効果の従属変数については、ウェルビーイングの他に、創作活動や創造性への影響も興味深い検討課題として残されている。

特に、空想傾性のポジティブ機能を理解する上で注目されるのが、フロー経験（flow experience）（Csikszentmihalyi, 1990[25]、浅川　二〇〇五[26]）との関連であろう。空想傾性者は、フロー意識状態に入りやすいことが予想されるが、この点に関する実証的な研究はまだ行われていない。予備的な調査として我々は空想傾性尺度（CEQ）とフロー経験の個人差に関する質問紙（三二項目）（石村　二〇〇八[27]）を大学生に実施し、両尺度の間に相関関係（$r = .332$, $p < .01$, $n = 104$）を確認している。空想傾性の高い人たちがどんな状況においてフロー経験が促進されるのかについては、今後さらに吟味していく必要がある。これらの点を明らかにすることも今後のイメージのポジティブ機能の研究の課題となる。

〔引用文献〕

(1) 松岡和生　心的イメージ（行場次朗、箱田裕司編　知性と感性の心理）福村出版　七六―九二頁　二〇〇〇

(2) 松岡和生　感情とイメージ（畑山俊輝編　感情心理学パースペクティブ）北大路書房　八〇―八九頁　二〇〇五

(3) 宮崎拓弥、菱谷晋介　ネガティブ・ポジティブ情動イメージの構造　イメージ心理学研究　第二巻　三五―四九頁　二〇〇四

(4) 本山宏希、宮崎拓弥、菱谷晋介　イメージの視覚情報と感情情報の共起性に関する研究　認知心理学研究　第五巻　一一九―一二九頁　二〇〇八

(5) Holmes, E. A., Geddes, J. R. Colom, F., & Goodwin, G. M. 2008 Mental imagery as an emotional amplifier : Application to bipolara disorder. Behaviour Research and Therapy, 19, 1–8.

(6) Wilson, S. C., & Barber, T. X. 1983 The fantasy–prone personality : Implications for understanding imagery, hypnosis, and parapsychological phenomena. In A. A. Sheikh (Ed.), Imagery : Current theory, research, and implication. New York : John Wiely & Sons. Pp. 340–387.

(7) F・W・パトナム（中井久夫訳）解離　みすず書房　二〇〇一

(8) Galton, F. 1883 Inquiries into human faculty and its development. London : MacMillan and Co.

(9) 松岡和生　直観像：素質者の特性と直観像形成の基礎過程（菱谷晋介編　イメージの世界）ナカニシヤ出版　一三―一四七頁　二〇〇一

(10) Lynn, S. J., & Rhue, J. W. 1988 Fantasy proneness : Hypnosis, developmental antecedents, and psychopathology. American Psychologist, 43, 35–44.

(11) Merckelbach, H., Horselenberg, R., & Muris, P. 2001 The creative experiences questionnaire (CEQ) : A brief self–report measure of fantasy proneness. Personality and Individual Differences, 31, 987–995.

(12) Merckelbach, H., & Van de Ven, V. 2001 Another white Christmas : Fantasy proneness and reports of 'hallucinatory experiences' in undergraduate students. Journal of Behavior Therapy and Experimental Psychiatry, 32, 137–144.

(13) Merckelbach, H., Horselrmberg, R., & Schmidt, H. 2002 Modeling the connection between self–reported trauma and dissociation in a student sample. Personality and Individual Differences, 32, 695–705.

(14) 岡田　斉、松岡和生、轟木知佳　質問紙による空想傾向

の測定：Creative Experience Questionnaire 日本語版（CEQ-J）の作成　人間科学　第二六号　一五三―一六一頁　二〇〇四
(15) Cuper, P. F., & Lynch, T. R. 2009 When is fantasy proneness associated with distress? An examination of two models. Imagination, Cognition and Personality, 28, 251–268.
(16) 松岡和生、岡田　斉　空想傾向（Fantasy proneness）が精神的健康（Well-being）に及ぼす効果：性格特性と日常生活のイメージ経験との相互関連性　日本イメージ心理学会第六回大会発表論文集　三二―三三頁　二〇〇五
(17) 籐南佳世、園田明人、大野　裕　主観的健康感尺度（SUBI）日本語版の作成と信頼性、妥当性の検討　健康心理学研究　第八巻　一二―一九頁　一九九五
(18) 堀毛一也　主観的充実感とビッグ・ファイブ　現代行動科学会誌　第一五号　一―八頁　一九九九
(19) 嶌田久美、増山英太郎　デザイン活動における直観像の機能に関する基礎的研究　人間工学　三六巻　三一一―三一八　二〇〇〇
(20) 松岡和生、堀毛一也　空想傾向（fantasy proneness）のポジティブ機能―主観的充実感と自尊感情に及ぼす効果　日本心理学会第七〇回大会発表論文集　一〇一七頁　二〇〇六
(21) Keyes, C. L. M., Shmotkin, D., & Ryff, C. D. 2002 Optimizing well-being: The empirical encounter of two traditions. Journal of Personality and Social Psychology, 82, 1007–1022.
(22) 和田さゆり　性格特性用語を用いたBIG Five尺度の作成　心理学研究　第六七巻　六一―六七頁　一九九六
(23) Larsen, R. J., & Diener, E. D. 1987 Affect intensity as an individual difference characteristics: A review. Journal of Research in Personality, 21, 1–39.
(24) 松岡和生　空想傾向（Fantasy Proneness）のポジティブ機能（2）：感情強度、主観的Well-Being及び自尊感情との関連性　日本イメージ心理学会第七回大会発表論文集　九―一〇頁　二〇〇六
(25) Csikszentmihalyi, M. 1990 Flow: The psychology of optimal experience. New York: Harpaer and Row.
(26) 浅川希洋志　フロー経験の諸側面　島井哲志（編）ポジティブ心理学　四七―六五頁　二〇〇五
(27) 石村郁夫　フロー体験の促進要因とその肯定的機能に関する心理学的研究　筑波大学人間総合科学研究科博士論文　二〇〇八

〔まつおか・かずお　岩手大学人文社会科学部教授〕